

Title	青年期と成人期における愛着スタイルと防衛スタイルの関連性
Author(s)	蓮花, のぞみ
Citation	生老病死の行動科学. 2008, 13, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6998
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

青年期と成人期における愛着スタイルと防衛スタイルの関連性

A relationship between attachment styles and defense styles in early adults and adults

(大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程) 蓮 花 のぞみ

Abstract

The present study was conducted to demonstrate the relationship between attachment styles and defense styles in early adults and adults. Participants were 452 (early adult group were 252 & adult group are 202). In both groups, “Anxiety about relationship” and “Avoidance of intimacy” of the two attachment dimensions positively correlated to the immature defense style. Moreover, “Anxiety about relationship” was positively correlated to the neurotic defense style, but negatively correlated to the mature defense style. “Anxiety about relationship” positively correlated to the immature defense style, too. The obvious differences between secure attachment style and insecure attachment styles were demonstrated regarding to the defense styles. For adult group, “Avoidance of intimacy” was positively correlated to the mature style. “Anxiety about relationship” and the immature style for the adult group were lower than those of the early adult group, and the mature defense style for the adult group was higher than that of the early adult group. These results were discussed in the view point of a life development of attachment and defense styles.

Key word: attachment style, defense style, early adult, adult

I 問題

1. Bowlbyの愛着理論

Bowlby (1973, 1982) の愛着理論は、子どもの主要な養育者に対する“情緒的な絆”に関する研究である。人は愛着対象との具体的相互作用を通して、愛着に関する個人の心的状態“内的作業モデル”(Internal Working Model: 以下 IWM と略す) を形成するとされる。愛着理論は“揺りかごから墓場までの愛着”(Bowlby, 1979) 関係の発達や変化と、安定した絆が形成されなかった場合に生じる精神病理学的な影響について、豊富な知見を提出している(工藤, 2002)。

近年、実証的研究の関心は、外的に捉えられる愛着行動から、他者との関係における主観的な内的構成に移行してきている。内的自己の IWM の中核をなすのは、自分自身が愛着対象にどのように受容されているか否かについての主観的な考えである(遠藤, 1992)。一般的に、人は複数の愛着対象を持ち、主要な愛着対象は時とともに移行すると考えられている。しかし、いずれにしても IWM は生涯にわたり存在し続け、個人にとってストレスや脅威を感じるような状況において無意識的に活性化されやすい(Bowlby, 1969)。

これまでの多くの研究は、乳幼児期の愛着行動に主たる焦点をあてていたが、近年、愛着研究者の実証的関心が、乳幼児期の愛着パターン(およびそれと養育者の関わりとの関連性)

の分析から、生涯発達過程を視野に入れた、乳幼児期以降の多様な愛着関係の分析へと確実に移行してきている (Greenberg, Cicchetti & Cummings, 1990 ; Parkes, 1991)。その結果、大多数の個人において、初期に形成された愛着のパターンが長期にわたり連続した形で存在し続けることが確認されている (Main, 1995)。このことから、青年期、成人期、中年期以降の生涯発達過程を視野に入れて愛着関係の分析を行うことの意義は大きい。

2. 愛着スタイルの測定法と分類

青年期・成人期の実証的な愛着研究が本格的に問われるようになった契機として、Main, Kaplan & Cassidy (1985) による、“成人愛着面接” (Adult Attachment Interview) の開発が挙げられる。その測定法により、具体的行動としてではない成人の IWM を実証的に解明する道が切り拓かれた。ここでの愛着は通常意識されないものと考えられている。一方、質問紙によって測定されているのは、IWM が働いた結果としての、個人が意識化している対人的態度であると考えられている (北村, 2008)。このような愛着スタイルは、自分自身が愛着対象にどのように受容されているか否かについての主観的な考えをもとに形成されたものであり、ネガティブな感情を体験するような状況で、他者とやりとりを行うことでその感情を和らげるためにとるものである (Fraley & Shaver, 1998)。本研究では、愛着スタイルを、成人愛着研究の慣習に従い、“愛着の IWM” という従来の意味で用いる。

中尾・加藤 (2004) が作成した、一般他者を想定した愛着スタイル尺度の原版は、Brennan, Clark & Shaver (1998) の作成した “the Experiences in Close Relationships inventory the generalized other version” であり、Hazan & Shaver (1987) が開発した 3 カテゴリー尺度や Batholomew & Horowitz (1991) が開発した 4 カテゴリーの強制選択式尺度など数多くの既存の尺度を踏まえて開発されており、信頼性と妥当性が十分確認されているため (中尾・加藤, 2004)、多くの研究者がこの尺度が用いている (Faley, Garner & Shaver, 2000)。Brennan et al. (1998) や Batholomew & Horowitz (1991) は、それまで Ainsworth, Blehar, Waters & Wall (1978) の 3 カテゴリー (安定型、回避型、アンビバレント型) に慣習的に従ってきた成人愛着スタイルの分類基準に、4 カテゴリー (安定型、愛着軽視型、とらわれ型、おそれ型) を持ち込んだ。

Bowlby (1973) によると、乳幼児は、まず、愛着対象が自分を受け入れてくれるのか、といった他者への心的表象を形成し、その後、自分は愛されるに値する者なのか、といった自己への心的表象を形成する。Batholomew & Horowitz (1991) は、後者の自己への信念や期待、前者の他者への信念や期待に注目することで、青年・成人期の愛着スタイルが自己観・他者観といった二つの次元軸から解釈可能であるとの見解を示した。その後、理論的に自己観に対応する“見捨てられ不安”と、他者観に対応する“親密性の回避”の二次元が見出された (Brennan et al., 1998 : Figure1)。“見捨てられ不安”とは、他者に見捨てられることへの不安、その関係を維持しうることへの不安であり、“親密性の回避”とは、他者との親密さの回避や他者に心を開くことの拒否である。

3. 愛着スタイルと防衛機制との関連

個人にとってストレスや脅威を感じるような状況において、人は自らが傷つくのを守るために、防衛機制を働かせる。防衛機制とは、感情や考えや記憶を無意識あるいは意識的な心

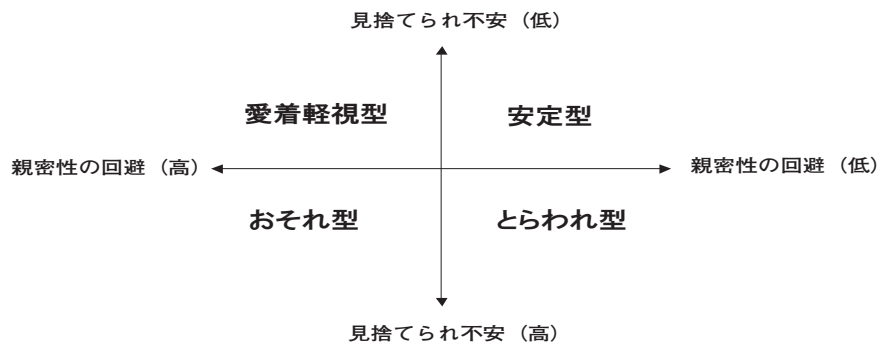


Figure 1 Brennan ら (1998) による愛着スタイルの分類

理操作によって、無意識下に押しやったり、歪めたりして、欲求不満な状態を緩和・回避することで、自らが傷つくのを防衛する自我の機能を示す (Freud, 1936)。例えば、防衛機制の働きには、抑圧、隔離、否認、逃避、退行、反動形成などが挙げられる。不安定な愛着スタイルを持っているにもかかわらず、防衛機制を働かせることで、一見すると社会に適応できていると捉えられる場合や、一般的には不適応な行動が実は自らを守るために必要な防衛機制を働かせた結果生じている場合が考えられる。また、安定した愛着スタイルの人でも日常生活の中で独自の防衛機制が働いている。表面上に現れる行動だけではなく、その背景を理解するためにも、防衛機制を把握する試みは重要である。

不安定な愛着スタイルである愛着軽視型、とらわれ型、おそれ型に関して、工藤 (2002) によると、愛着軽視型の人々は、愛着対象から拒絶される不安や恐れを感じず、愛着関係を否認、軽視し、親密な関係を攻撃的に拒む。他方、とらわれ型の人々は、他者との親密な関係を希求しそれが無くなることへの不安を強く持ち、常に他者との関係を維持し、距離を近づけようとすると考えられている。また、おそれ型は、愛着軽視型の人々のように表面的には他者から一定の距離をとり親密な関係を持たないという特徴を持ちながら、他方ではとらわれ型の人々のように親密な関係を求めている。しかし、おそれ型は他者から拒否される不安を感じており、愛着やつながりを求める気持ちは失われておらず、むしろそうした関係を何とか維持するために、自らの苦痛や葛藤、不満などを自分の中に抱え込み、他者に向けないように抑制している、とされる。以上のように、葛藤状況やネガティブな状況下で、どの愛着スタイルも、同じように防衛機制を働かせるとはいえ、その用いる防衛機制の内容は異なることが示唆されている。理論的には、愛着行動には様々な防衛機制が働いていると考えられているが、愛着スタイルと防衛機制に関する実証研究は全くなされていないのが現状であるため、愛着スタイルと防衛機制の関連性を実証的に研究することの意義が大きいといえる。

4. 防衛機制研究について

近年、欧米では防衛機制は実験的なアプローチによって研究されてきている (Hentschel et al., 1993)。しかし、日本では、防衛機制という言葉自体は多くの場面で用いられてきたものの、概念の整理に関して十分に整理されておらず、防衛機制の研究も少ない (中西, 1999)。防衛機制は心理臨床の現場で観察されてきたが、評定者間の信頼性の低さという問

題があった。防衛機制の実証的研究のためには、防衛機制が客観的に測定されなければならない。そうでなければ他の研究者が、結果を追試することができず、事実を確認できないからである。従来からの測定方法には、大別して、質問紙、投影法、サブリミナル・アプローチ、面接法などがある。その中で、近年質問紙法が発展してきた。

防衛機制を特定する際の評定者間信頼性という問題を克服するために、Bond, Gardner, Christian & Sigal (1983) は“*The Defense Style Questionnaire*”という質問紙を発表した。この防衛スタイル尺度は、防衛機制を直接測定するわけではなく、外からの刺激への対応の自己評価によって、無意識に機能する防衛機制を探るものである。防衛スタイルとは、葛藤状況に対処する際に、意識的にせよ無意識的にせよ、自らが傷つくのを防衛するために用いられる特徴的なスタイルである(中西, 1999)。防衛スタイル尺度の日本語版 DSQ42 は、質問項目が 88 あった 1984 年版の DSQ (Bond, 1986) の改良版 (Andrews, Sighn & Bond, 1993) をもとに、作成された(中西, 1998)。

Bond(1986)によると、質問紙には限界があるが、標準化された形でどの防衛がどの程度存在するのかを測定でき、様々な精神病理(または精神的健康度)水準を区別できる分岐点を探る可能性を開くことになる。防衛機制は無意識の機能であり、自己申告では測定できないという批判もある。これらの批判に対して、Bond et al. (1983) は三つの理由を挙げて反論している(中西, 1999)。すなわち、(1) 時として防衛はその役割を果たすことができず、人々は容認できない衝動や通常なされるその衝動への防衛スタイルに気付くことができる、(2) 防衛が起こっている時に気付かなくとも、回りの人間からたびたび自分の防衛機制について指摘される、(3) 自分にとっての防衛的行動が取れない時に、不安や抑うつを感じたことを記憶していることがありうる、という 3 点である。防衛スタイル尺度は何度も改良が行なわれ、様々な研究でその妥当性が報告されている。例えば、人格障害との関連 (Johnson, Bornstein & Krukonis, 1992) や、気質や性格との関連 (Mulder, Joyce, Sellman, Sullivan & Cloninger, 1996) で、有意な相関が見られることが報告されている。

II 目的

本研究では、愛着の生涯発達過程を視野に入れ、青年期と成人期を対象として、各愛着スタイル特有の防衛スタイルについて実証的に明らかにすることを目的とする。愛着スタイルと防衛スタイルは、理論的には関連が示唆されているが、実証的研究は全くなされていないため、愛着スタイルと防衛スタイルの関連を明らかにすることは意義があるといえる。本研究では、愛着スタイルの 2 次元である“見捨てられ不安”と“親密性の回避”が、防衛スタイルの 3 つの下位概念である“未熟な防衛スタイル”及び“神経症的な防衛スタイル”、“成熟した防衛スタイル”との間にどのような関連があるかを検討する。

III 方法

1. **調査対象** 調査対象者は、全体は 458 名であった(青年期 256 名、成人期 202 名)。青年期の調査対象者は、大学生であり、男性 77 名、女性 175 名、性別無記入 4 名、平均年齢は 20.63 歳 ($SD = 2.74$) であった。成人期の調査対象者は、大学生の子どもを持つ母親であり、女性 202 名、平均年齢は 49.82 歳 ($SD = 4.16$) であった。
2. **手続き** 青年期の対象者に対して、大学の授業において質問紙を配布して実行した。成

人期の対象者に対して、同じ学生に母親在宅の住所を記入する封筒、母親が子どもの自筆であると確認できる署名かメッセージを記入する依頼書を配布し、記入してもらい、郵送調査を実施した。郵送調査による有効回収率は86.0%であった(235名中202名)。

3. 調査時期 2006年10月末～11月上旬に調査を行い、11月末に回収を行った。

4. 質問紙の構成

(1) 属性 個人属性として、年齢と性別への回答を求めた。

(2) 多項目式愛着スタイル尺度親密な対人関係全般版(以下 ECR-GO と略す)

中尾・加藤(2004)が作成した、一般他者を想定した親密な対人関係全般の中で現れる愛着スタイルを測定するための多項目式尺度(36項目)であり、Brennan, Clark & Shaver, (1998)の“the Experiences in Close Relationships inventory the generalized other version”を参考に作成された。成人の愛着スタイルを構成する次元として、“見捨てられ不安”と、“親密性の回避”の2次元が見出されている。“見捨てられ不安”(項目例:「私が人のことを大切に思うほどには、人が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する」)と“親密性の回避”(項目例:「私は人とあまりに親密になることがどちらかというと好きではない」)は、各18項目で構成されている。尺度の評定は、7件法(“1. 全く当てはまらない”～“7. 非常によく当てはまる”)を用いた。

(3) 防衛スタイル尺度(以下 DSQ と略す)

中西(1998)が作成した、自己申告式の防衛スタイル尺度(42項目)であり、Andrews, Singh & Bond(1993)の“Defense Style Questionnaire”を参考に作成された。DSQは3つの上位概念からなる20の防衛スタイル(未熟な防衛: 投影、受動攻撃、行動化、隔離、価値下げ、自閉的空想、否認、置き換え、解離、分裂、合理化、身体化/神経症的な防衛: 打ち消し、エセ愛他主義、理想化、反動形成/成熟した防衛: 昇華、ユーモア、予測、抑制/虚偽尺度)をそれぞれ2項目で判定するものである。“未熟な防衛”(項目例:「行動化…何かに悩まされている時には、しばしば衝動的に行動する」)及び“神経症的な防衛”(項目例:「反動形成…当然怒りを感じるべき人に対して、自分がとても親切であることにしばしば気がつく」)、“成熟した防衛”(項目例:「昇華…不快を抑えるために何か建設的かつ創造的なことをする」)で構成されている。尺度の評定は9件法(“1. 私に全然当てはまらない”～“7. 私に全く当てはまる”)を用いた。

IV 結果

1. 愛着スタイル尺度と防衛スタイル尺度の構成

1) 愛着スタイル尺度の信頼性

愛着スタイル ECR-GO 尺度36項目について、ECR-GOを用いた従来の研究(中尾・加藤, 2004)と同様、理論上、“見捨てられ不安”と“親密性の回避”の2因子構造が妥当であると考へた。従来の研究に従って、重み付けのない最小二乗法・Varimax 回転による因子分析を行ったところ、想定通りの因子構造となり、因子妥当性が確認された。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、“見捨てられ不安”で $\alpha = .91$ 、“親密性の回避”で $\alpha = .91$ と高い信頼性が得られた。

Table 1 愛着スタイル尺度と防衛スタイル尺度得点

尺度名	青年期の平均値 (SD)	成人期の平均値 (SD)	危険率
愛着スタイル ECR-GO			
見捨てられ不安	3.56 (.88)	2.90 (.84)	$p < .001$
親密性の回避	3.57 (.95)	3.49 (.81)	<i>n.s.</i>
防衛スタイル DSQ			
未熟な防衛	4.09 (.77)	3.78 (.76)	$p < .001$
神経症的な防衛	4.32 (.96)	4.43 (1.02)	<i>n.s.</i>
成熟した防衛	4.98 (.98)	5.22 (.98)	$p < .05$

2) 防衛スタイル尺度の信頼性

先行研究を基に、3つの下位概念“未熟な防衛”“神経症的な防衛”“成熟した防衛”に分類した。内的整合性を検討するために、各3水準の α 係数を算出した。“未熟な防衛”は $\alpha = .75$ 、“神経症的な防衛”は $\alpha = .57$ 、“成熟した防衛”は $\alpha = .59$ となった。後者の2つの下位概念の信頼性はそれほど高くはない。本研究の対象者の人数の少なさに原因が考えられる。DSQは標準化された防衛機制尺度であり、先行研究により一定の妥当性も確認されているため、本研究ではDSQを用いて分析を行った。

2. 愛着スタイルと防衛スタイルの年代による検討

青年期群と成人期群間の差の検討を行うために、ECR-GO尺度の各因子得点と、DSQ尺度の各得点についてt検定を行った(Table1)。その結果、ECR-GOの“見捨てられ不安”について、青年期は成人期よりも有意に高い得点を示した($t(446) = 7.95, p < .001$)。一方、“親密性の回避”については、群間の得点差は有意ではなかった($t(425) = .95, n.s.$)。次に、DSQに関しては、“未熟な防衛”について、青年期は成人期よりも有意に高い得点を示した($t(442) = 4.20, p < .001$)。一方、“成熟した防衛”について、青年期は成人期よりも有意に低い得点を示した($t(450) = 2.55, p < .05$)。“神経症的な防衛”については群間の得点差は有意ではなかった($t(449) = 1.13, n.s.$)。したがって、青年期は成人期よりも見捨てられ不安が高いことが明らかとなった。また、青年期は成人期よりも未熟な防衛スタイルが強い一方、成熟した防衛スタイルが弱いことが示された。

3. 愛着スタイルと防衛スタイルの関係

愛着スタイルと特有の防衛スタイルには関連があるかを明らかにするために、Pearsonの積率相関係数を算出した。上記より愛着スタイルと防衛スタイルに関して、青年期と成人期間で明らかな差が確認されたため、本研究では青年期の場合と成人期の場合を別々に分析を行った。

(1) 青年期の場合

青年期群において、ECR-GOとDSQとの関連についてTable2に示す。“見捨てられ不

Table2 青年期群の ECR-GO と DSQ の相関分析結果

	見捨てられ不安	親密性の回避
未熟な防衛	.42**	.39**
神経症的な防衛	.36**	-.10
成熟した防衛	-.21**	-.11

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table3 成人期群の ECR-GO と DSQ の相関分析結果

	見捨てられ不安	親密性の回避
未熟な防衛	.56**	.27**
神経症的な防衛	.43**	-.11
成熟した防衛	-.25**	-.16*

* $p < .05$, ** $p < .01$

安”は“未熟な防衛”、“神経症的な防衛”との間に、中程度の正の有意な相関（順に $r = .42$, $p < .01$; $r = .36$, $p < .01$ ）が得られた。一方、“成熟した防衛”との間には、負の有意な相関（ $r = -.21$, $p < .01$ ）が得られた。また、“親密性の回避”は“未熟な防衛”との間に、中程度の正の有意な相関（ $r = .39$, $p < .01$ ）が見られた。“親密性の回避”と“神経症的な防衛”と“成熟した防衛”との間の相関は有意ではなかった。つまり、見捨てられ不安の高い人は、未熟な防衛スタイルと神経症的な防衛スタイルが強く、成熟した防衛スタイルが弱いことが明らかとなった。一方、親密性の回避の高い人は、未熟な防衛スタイルが強いことが示された。しかし、親密性の回避と神経症的な防衛スタイル及び成熟した防衛スタイル防衛との関連は見出されなかった。

(2) 成人期の場合

成人期群において、ECR-GO と DSQ との関連について Table3 に示す。“見捨てられ不安”は“未熟な防衛”との間に、やや強い正の有意な相関（ $r = .56$, $p < .01$ ）、“神経症的な防衛”との間に、中程度の正の相関（ $r = .43$, $p < .01$ ）が得られた。一方、“成熟した防衛”の間には、負の有意な相関（ $r = -.25$, $p < .01$ ）が得られた。また、“親密性の回避”は“未熟な防衛”との間に、正の有意な相関（ $r = .27$, $p < .01$ ）が見られた。一方、“成熟した防衛”の間には、やや弱い負の有意な相関（ $r = -.16$, $p < .05$ ）が得られた。“親密性の回避”と“神経症的な防衛”との間の相関は有意ではなかった。つまり、見捨てられ不安の高い人は、未熟な防衛スタイルと神経症的な防衛スタイルが強く、成熟した防衛スタイルが弱いことが明らかとなった。一方、親密性の回避の高い人は、未熟な防衛スタイルが強く、成熟した防衛スタイルが弱いことが示された。親密性の回避と神経症的な防衛スタイルとの関連は見出されなかった。

V. 考察

本研究結果より、愛着スタイルと防衛スタイルの変数間には、概ね関連が認められた。まず、全体として、愛着スタイルの両因子である見捨てられ不安の高い人も親密性の回避の高い人も、未熟な防衛スタイルが強いという関連が明らかになった。さらに、見捨てられ不安の高い人は、未熟な防衛スタイルに加えて神経症的な防衛スタイルも高い一方、成熟した防衛スタイルが低いといった特徴が示された。つまり、安定した愛着スタイルと不安定な愛着スタイルの用いる防衛スタイルには明らかな差があることが示された。安定スタイルを持つ人は、他者の対人関係において葛藤が生じた時でも、上手に防衛スタイルを用いて、感情をコント

ロールして対応し、社会的に適応した行動を取る。一方、不安定な愛着スタイルを持つ人は、同じような葛藤状況に、未熟な防衛スタイルや神経症的な防衛スタイルを用いて対処し、結果として、社会的に不適応な行動を取ることが考えられる。ネガティブな状況下で、同じように防衛スタイルを用いたとしても、未熟な防衛スタイルか成熟した防衛スタイルを用いているのかによって、行動は大きく異なる。このように、愛着スタイルと防衛スタイルを検討することで、表面上の行動を理解することは重要であり、愛着スタイルと防衛スタイルの関連を実証的に示したことが本研究の意義といえる。

青年期と成人期の愛着スタイルと防衛スタイルの関連の仕方は、ほぼ同様の結果が得られた。しかし、青年期と成人期に関して個別に見た場合、次のような違いが見られた。青年期に関して、親密性の回避と神経症的な防衛スタイル及び成熟した防衛スタイルは関連がなかった一方、成人期に関して、親密性の回避の高い人は、成熟した防衛スタイルが弱いといった関連が明らかになった。つまり、成人期において、他者との親密さを回避したり拒否する傾向の高い人は、成熟した防衛スタイルが弱いといった特徴が明らかになった。

次に、年代による差の分析結果を検討する。愛着スタイルに関して、成人期は青年期よりも見捨てられ不安が低いことが示されている。つまり、成人期は青年期よりも、他者と親密になることや、その関係が無くなることへの不安を持つことは少ないため、安定した愛着スタイルをもつ傾向が高いといえる。成人期までに特定の他者との親密な関係を築くことが出来ている人は、そうでない人よりも愛着スタイルが安定している可能性がある。また、不安定な愛着スタイルは容易に変えることが出来ないと理論上言われているが、年齢に伴って、もしくは経験を通して変容する可能性はあるだろう。

防衛スタイルに関して、成人期は青年期よりも未熟な防衛スタイルが弱く、反対に成熟した防衛スタイルが強いことが明らかになった。年代が低いほど、欲求不満な状態や葛藤状況に対処する際、幼い頃に自らが傷つくことを防ぐために身につけた単純な、もしくは無意識的な防衛スタイルを習慣的に用いているのではないかと考えられる。成熟した防衛は、不快を抑えるために何か建設的なことをするといった昇華、苦しい状況でもその面白い側面を見つけるといったユーモア、困難な状況の内容を予測し対策を立てるといった予測、活動の妨げになるような感情を抑えるといった抑制など、どちらかという意識的に自らの心理状態を操作する特徴が見られる。年代が上がるにつれ、このような防衛を身につけていく可能性が考えられる。また、親密性の回避と神経症的な防衛は年代による差が見られなかったことから、他者との親密さを回避したり拒否する傾向、打ち消しや愛他主義、理想化、反動形成で構成されている神経症的な防衛スタイルは、年代以外の個人内要因が関連する可能性があると考えられる。

VI 今後の課題と展望

本研究は、青年期と成人期における愛着スタイルと防衛スタイルに関する横断研究である。年齢に伴って不安定だった愛着スタイルから安定した愛着スタイルへの移行するのか、さらには未熟な防衛スタイルから成熟した防衛スタイルへと移行するどうかを検討するためには、青年期から成人期にかけて愛着スタイルと防衛スタイルに関する縦断研究が必要となる。年齢に伴って、もしくは経験を通して、愛着スタイルが変容する可能性が考えられるため、成人愛着スタイルの生涯発達について、更なる検討が望まれる。特に、中年期以降の対象者

による研究報告は数少なく、高齢期に対する研究はほとんどなされていない。今後、愛着スタイルの生涯発達を考慮して、中年期・高齢期に着目して研究することが期待される。本研究では、青年期と成人期の年代を対象に検討を行ったが、青年期群は男女である一方、成人期群の属性が女性のみであるため、サンプリングに基づく結果の一般性には慎重であるべきであり、今後サンプリング手法の改善などの研究手法を工夫することで対象者層を広げ、より妥当な研究へと結びつけたい。

次に、防衛機制に関して、本研究では質問紙という一定の客観性を有する測定法を用いて分析した。しかし、DSQ 尺度に関しては、さらに正確に測定するために統計分析手法を改良したり、その他の防衛機制テストとの併用や質問紙項目を加えてより優れた測定尺度を開発するなど、有効な活用法を研究することが今後の防衛機制研究の進展のために重要である。また、中西（1998）によると、9 件法で回答者が苦勞するという意見は聞かれていないと述べられていたが、本研究では回答数が多く時間がかかり、調査対象者が疲れてしまった。それゆえ、5 件法や 7 件法に変更して、調査する必要性もある。一見しただけではわからない行動の裏に隠された防衛機制に関して、理論的・個別的な検討だけでなく、防衛機制研究に実証的関心が向けられるべきだと思われる。

謝 辞

本研究を行うに当たって、多大なる支援と助言を下された神戸大学大学院の吉田圭吾先生、甲南女子大学大学院の佐藤眞子先生に、深く感謝の意を表します。また、ご協力下さいました協力者の方には厚く御礼申し上げます。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Andrews, G., Sigh, M., & Bond, M. 1993 The Defense Style Questionnaire. *The Journal of Nervous and Mental Disease* **181**(4) Pp.246-256
- Batholomew, K., & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four-category model *Journal of Personality and Social Psychology* **61** Pp.226-244
- Bond, M., Gardner, S. T., Christian, J., & Sigal, J. 1983 Empirical study of self-rated defense styles *Archives of General Psychiatry* **40** Pp.333-338
- Bond, M. 1986 Bond's defense Style Questionnaire (1984 version). Vaillant GE (Ed) *Empirical Studies of Ego Mechanisms of Defense*. Washington DC: American Psychiatric Press.
- Bornstein, R. F., Greenberg, R. P., Leone, D. R., & Galley, D. J. 1990 Defense-mechanism correlates of orality. *Journal of the American Academy of Psychoanalysis*, **18**, Pp.654-666.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss: Vol.2, Separation*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1980 BY ethology out of psycho-analysis-an experiment In *Inter-Breeding. Animal Behaviour*, **28**, Pp.649-656.

- Bowlby, J. 1982 *Attachment and loss. Vol.1.Attachment*. New York:Basic Books. (黒田実郎訳 1976 母子関係の理論：愛着行動 岩崎学術出版社)
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of adult attachment: an integrative overview. In J.A.Simpson&W.S.Rholes(Eds.) *Attachment theory and close relationships*. New york:The Guilford Press Pp.46-76
- Bretherton, I. 1990 Communication patterns, internal working models, and the intergenerational transmission of attachment relationships. *Infant Mental Health Journal*, **11**, Pp.237-252.
- 遠藤利彦 1992 内的作業モデルと愛着の世代間伝達 東京大学教育学部紀要 **32** Pp.203-220
- Fraley, R. C. & P. R. Shaver 1998 Airport separations: A naturalistic study of adult attachment dynamics in separating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, Pp.1198-1212.
- Fraley, R. C., Garner, J. P., & Shaver, P. R. 2000 Adult attachment and the defensive regulation of attention and memory: Examining the role of preemptive and postemptive defensive processes *Journal of Personality and Social Psychology* **78** Pp.350-365
- Greenberg, M. T., Cicchetti, D., & Cummings, E. M. 1990 *Attachment in the preschool years*. Chicago (Eds.): The University of Chicago Press.
- Grossmann, K., Fremmer-Bombik, E., Rudolph, J., & Grossmann, K. E. 1988 Maternal attachment representation as related to patterns of infant-mother and maternal care during/the first year. In R.A. Hinde, & J.Stevenson-Hinde (Eds.), *Relationships within families;Mutual influences*. Oxford: Clarendon Press.
- Hentschel, U., Ehlers, W., & Peter, R. 1993 The measurement of defense mechanisms by self-report questionnaires. In U.Hentschel, G. J. W. Smith, W. Ethlers, & J. G. Draguns (Eds.), *The concept of defense mechanisms in contemporary psychology: Theoretical, research, and clinical perspectives* (Pp.53-86). New York: Springer-Verlag.
- Johnson, J. G., R. F. Bornstein & A. B. Krukonis 1992 Defense styles as predictors OF personality-disorder symptomatology. *Journal of Personality Disorders*, **6**, Pp.408-416.
- 工藤晋平 2002 見立てにおける愛着理論の観点の適用について－おそれ型の事例を通しての試論－ 九州大学心理学研究 **3** Pp.129-136
- Main, M., N. Kaplan & J. Cassidy 1985 Security in infancy, childhood, and adulthood – a move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50**, Pp.66-104.
- Mulder, R. T., P. R. Joyce, J. D. Sellman, P. F. Sullivan & C. R. Cloninger 1996 Towards an understanding of defense style in terms of temperament and character. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, **93**, Pp.99-104.
- 中西公一郎 1998 The Defense Style Questionnaire 日本語版 (DSQ₄₂) – 日本での防衛機

- 制研究のために－ 社会学研究科紀要 47 Pp.27-33
- 中西公一郎 1999 防衛機制の概念と測定 心理学評論 42(3) Pp.261-271
- 中尾達馬・加藤和生 2003 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか？－ 4 カテゴリー（強制選択式, 多項目式）と 3 カテゴリー（多項目式）との対応性
－ 九州大学心理学研究 4 Pp.57-66
- 中尾達馬・加藤和生 2004 “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の
検討 九州大学心理学研究 5 Pp.19-27
- Parkes, C. M., Stevenson-Hinde, J., & Marris, P. 1990 *Attachment across the life cycle*.
(Eds.) New York: Routledge.